

日本の先史文化と周辺地域 — 南方の視点から —

橋 本 征 治

Prehistoric Cultures of Japan and its Surrounding Regions as seen from the *Nanpō*

Seiji Hashimoto

In order to investigate the process of formation and development of the prehistoric culture of Japan, the cultures of the surrounding regions (East Asian, North Asian, Oceanic, and South East Asian Cultural Spheres) were analyzed in the framework of east-west and north-south axes. Also the races and the four major cultural elements, namely languages, stone tools, earthenware and agriculture were analyzed.

According to the result of the analysis, the formation and the development of the prehistoric culture of Japan were very complex and multiplex, which brought the regional diversities. As for the relations with the surrounding regions, multiple axes such as northern axis, east-west axis and southern axis were observed, and a two-way relations developed along each axis. So, in order to explain about this multi-layered and complex Japanese culture, it takes patient efforts to try to disentangle the process from time and space axes while keeping the two-way perspective, and to reconstruct it on the mesh of causality. One of the major tasks for that purpose is to regrab the Japanese culture from the viewpoint of the *nanpō*, considering the wide range of influence of the southern cultural spheres on the positioning of the prototype of Japanese, Austronesian language element in the old Japanese language, some stone tools leading to Taiwan, southern earthenware, the relations

between *Jomōn* cultivation and root-crop cultivation that preceded the rice cultivation. They were examined in this paper.

1 日本列島をとりまく文化圏

地球上の海陸分布は、更新世の氷河時代（約170万～1万年前）における寒暖の繰り返しによる海水準変動に応じて、大きく変化してきた。図1には日本列島を中心とする西太平洋地域における現在の水深200メ

ートルの等深線の概略が示されている。この等深線はほぼ大陸棚の境界（水深140メートル付近）に準じ、最終氷期（その最盛期は18000～20000年前）にはおおむね陸地であったと考えられる範囲の外縁となっている。これによると、アジア大陸を縁取る東南アジアの島々はスンダ（Sunda）半島を形成して大陸と連なり、オーストラリア大陸とニューギニア島も陸続きでサフル（Sahul）大陸を形成していた。当時は、日本列島もアジア大陸の東端に位置して、陸続きで北はサハリン、南は東シナ海・台湾方面へとつながっていた。当然、北から、西から、あるいは南から日本列島へとヒトや文化が流れ込み、列島における人類の

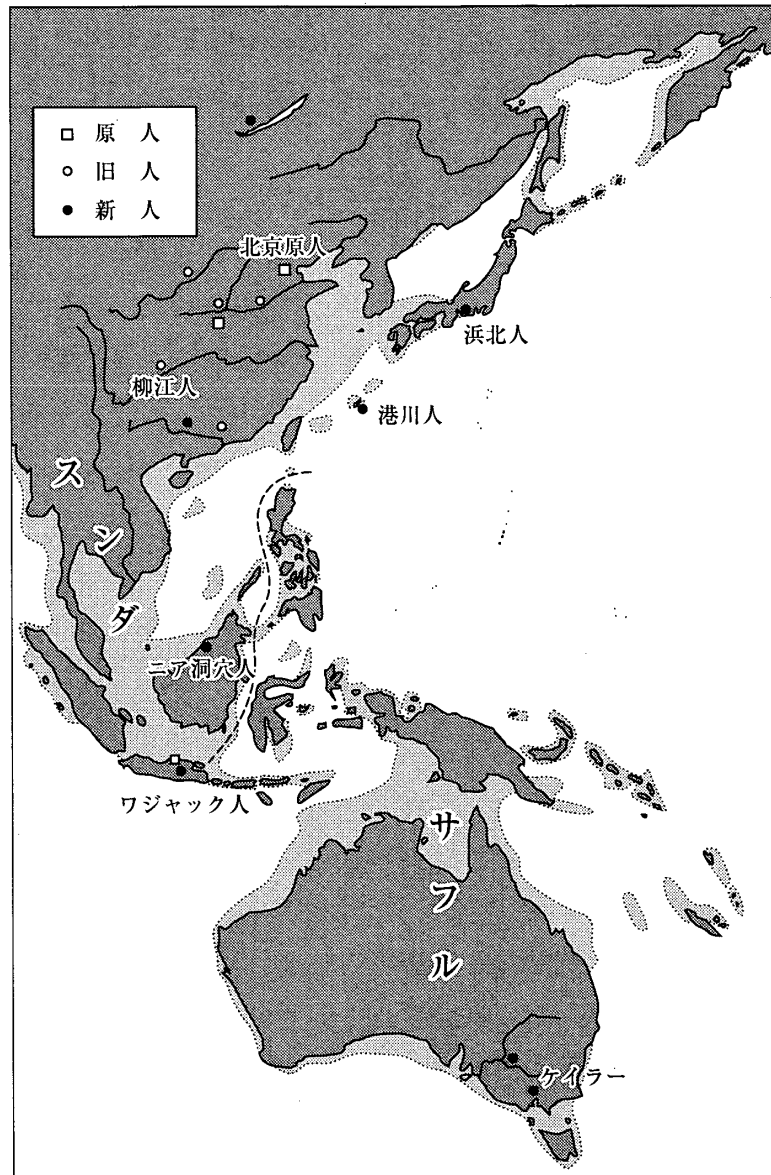


図1 西太平洋地域における原人・旧人・新人分布と大陸棚
 図中の破線はウォーレス（ハクスリー修正）線
 [典拠] 竹内理三他編，1982，22-23頁。ベルウッド，1989，27頁。

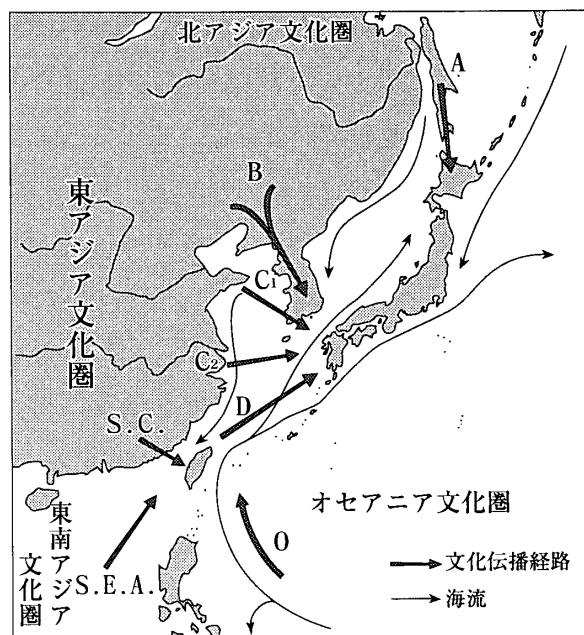
諸相を豊かにし、また複雑にもしてきた。
その後、気候の温暖化につれて沿岸域の陸地は水域によって相互に隔てられながらも、大小の陸塊が飛び石状に連なり、いわゆる花綵列島^{はなづな}を形成した。こうした島々を伝って、あるいは浅海を渡って¹⁾のヒトや文化の列島への流入・伝播は後を絶たなかった。

こうした自然環境を踏まえて、日本文化の起源と展開を周辺の文化圏との関係も視野に入れて考えるに当たっては、西太平洋とそれに属する諸地域（以下、西太平洋地域と呼ぶ）がその直接的な検討対象となろう。そこで、日本列島を中心とする西太平洋地域の諸文化圏を検討するに当たって、ヒ

ト・文化の交流回廊として図2に示したようなヨコ軸とタテ軸を設定したい。すなわち、ヨコ軸は西南日本～朝鮮半島～東アジアを結ぶ軸（図のB・C経路とほぼ重なる）であり、タテ軸は北アジア～サハリン～東北日本を結ぶ北軸（同A経路とほぼ重なる）と西南日本～台湾・大陸南東岸域～東南アジア・オセアニア西部を結ぶ南軸（同D経路にほぼ重なる）からなる。それぞれの軸は、東アジア文化圏、北アジア文化圏、東南アジア文化圏・オセアニア文化圏に連なり、各文化圏との文化交流の回廊となってきた。なお、北アジア文化と東南アジア文化が大陸寄りの経路を辿って伝播する場合は、東アジア文化圏を経由して日本列島に入ってくることになる。以下、これらの回廊を伝っての文化交流、特に文化流入を視野に入れながら、「南方の視点」²⁾からD経路に注目して日本の先史文化の一端を照射し、日本文化の起源と展開について議論するための筆者なりの足がかりを構築しようとするのが本論の狙いである。

2 いくつかの視点から

さて、日本列島をとりまく四つの文化圏を識別し、列島が東西と南北の2方向の基軸によってそれら諸文化と交流し、結ばれてきたことを確認したわけだが、それはまさに日本文化が複合的な文化であることを示唆している。しかしながら、南方文化については、これまで柳田(1961)の「海上の道」が否定的にとらえられ、岡(岡・八幡・江上・石田, 1948)の「イモ



A～D: 本文参照 S.C.: 中国東南部
S.E.A.: 東南アジア O: オセアニア

図2 日本列島をとりまく文化圏と文化伝播経路

栽培文化論」についても十分な展開がなされてこなかったという経緯がある。しかし、沖縄で発見された古人骨が東南アジアの島々の古い人種と通じる面が多いこと、オーストロネシア語が原日本語の成立と関わりをもつこと、土器についても南方系の土器群との関連性が注目されること、プロト農耕においてもイモ栽培に南方要素が色濃く認められることに鑑みるならば、日本の先史文化の展開における南方文化の位置について十分に議論を深める必要がある。そうした観点から積極的な発言を展開してきた佐々木が最近その成果を一書に纏めている（佐々木、2003）。その内容については、多くの部分で筆者も頷けるところである。本論では、筆者なりの観点でもって、四つの文化圏との関連に注目しつつ、先史時代の日本列島における文化複合の形成過程とその結果をいくつかの文化指標から、最近の研究成果を吸収しつつ、探ることにしたい。いくつかの具体的な論点を示しておこう。人種に関しては、遺伝学の発展をうけて形質人類学や分子人類学の分野において日本人の起源について、特にプレ縄文人について、単一起源というよりも異系統の混交という議論が展開されるなど、論ずべき点は多様である。言語についても、ツングース系言語に加えてオーストロネシア語の要素の日本語への混入が指摘されるなど、その構成はなかなか複雑である。また、石器や土器に関しても、細石刃文化の伝播と受容の仕方、縄文土器の発展過程から弥生土器出現に至る過程でみられる地域分化・融合の姿にこれら文化要素の複合性が如実に表れている。また、農耕面では、雑穀・イモ類を中心とする畑作の伝播・発達と稲作の伝来・普及に日本農耕の複合性が十分に読みとれる。そこで、上記の文化指標として人種と、言語・石器・土器・農耕という四つの文化要素を取り上げ、検討を進めていきたい。なお、農耕については、既に論じたところがあり（橋本、2001、2002）、先に佐々木（2003）も十分に議論しているところであるので、本論では必要な範囲で触れるに止めておきたい。

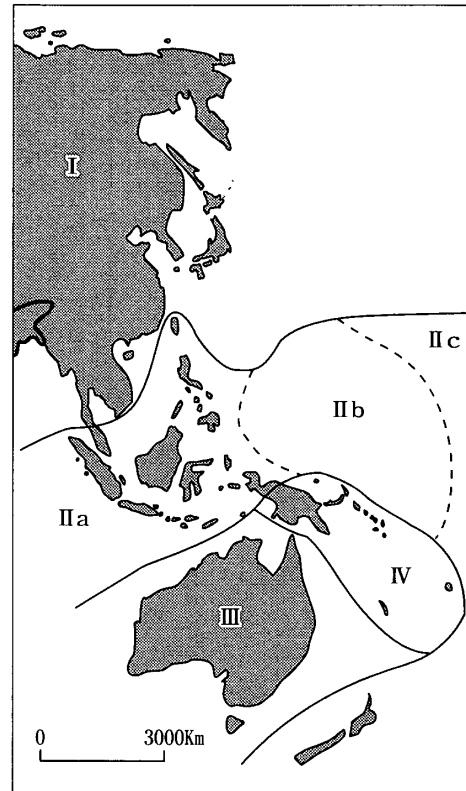
2.1 人種

図1に旧石器時代の古人骨の主たる発見場所を示しておいた。これによると、中国や東南アジアには古い人類の痕跡が多く残されていることがわかる。日本列島の最南端、沖縄島の具志頭村港川でも約1.8万年前のものと推定される旧石器時代の人骨がほぼ完全な形で発見され、港川人と命名された。この港川人は、がっしりとした顎をもち、彫りの深い顔立ちをしているところから、当初は縄文人や中国東南部の柳江人との類似性が指摘されたが、体形が華奢であることや卵形の頭骨をもつことからジャワ島のワジャク（Wajak）人やボルネオ島のニア（Niah）洞窟の新人、すなわち南方の人類との近縁性の高さが指摘されている³⁾（小田、2000、150）。

寶来 (1993, 69-98) らは、現日本人や中国人・韓国人らのミトコンドリアDNA分析⁴⁾、および古人骨分析からグループ I・II の 2 類型を抽出し、縄文人は DNA グループ II に分類され、南系スダララントに通じるとした。すなわち、小さな歯・二重^{まぶた}瞼・わきがなど、古モンゴロイドの特徴をそなえたインドネシアからミクロネシア・ポリネシアに至る南系モンゴロイド⁵⁾ (図 3) との近縁性が示唆されたわけである。DNA グループ II に対して、DNA グループ I は中国人・韓国人などに近似し、現代日本人との類似性が高いことから、縄文人とは異なった人々、おそらくモンゴル・中国からの南下グループのうち遅れて日本列島に渡来した人たちであり、弥生人の中核をなしていった人類集団であるという。

しかし、縄文人=南方系、弥生人=北方渡来系とする考え方に対しては異論もある。例えば、HLA (ヒト白血球抗原) を分析した徳永 (1993, 275) は、弥生期に南系モンゴロイド—海のモンゴロイドないし古モンゴロイドを指す (片山, 1993, 14) —の移住があったことを示唆している。馬場 (1990, 114-115) は Gm 遺伝子の分析から、アイヌや南西諸島の大部分の人々が古モンゴロイドの特徴を維持したのに対して、本土倭人の方は渡来人と混血したものとみている。一方、頭骨小変異測定法で縄文人・弥生人・現代人を比較した百々 (1995, 181-182) は、意外と琉球・奄美の人たちは弥生人に近いとして、弥生人が南西諸島にまで進出した可能性を示唆している。さらに遡って、プレ縄文人またはプロト縄文人と縄文人との間の各種データのズレに注目すれば、縄文人の成り立ちには人の移住や人種混交があったことがうかがわれることを指摘しておきたい。なお、アイヌと沖縄人について触れておくと、寶来 (1993, 69-98) は両者ともモンゴロイド系であり、アイヌは縄文人の名残をとどめるものの、塩基配列が弥生人と異なるなど、弥生系の要素は乏しいとしている。佐原 (佐々木・森島, 1993, 263-267) は、弥生人そして弥生文化そのものも当初は北海道や沖縄には及ばなかったとみられるとしている。

以上のように、細部にわたってみていくと日本人のルーツについてはかなり見解が分かれて



I 北系モンゴロイド II 南系モンゴロイド (IIa マレー系 IIb ミクロネシア系 IIc ポリネシア系) III オーストラロイド IV その他 (メラネシア人・パプア人)

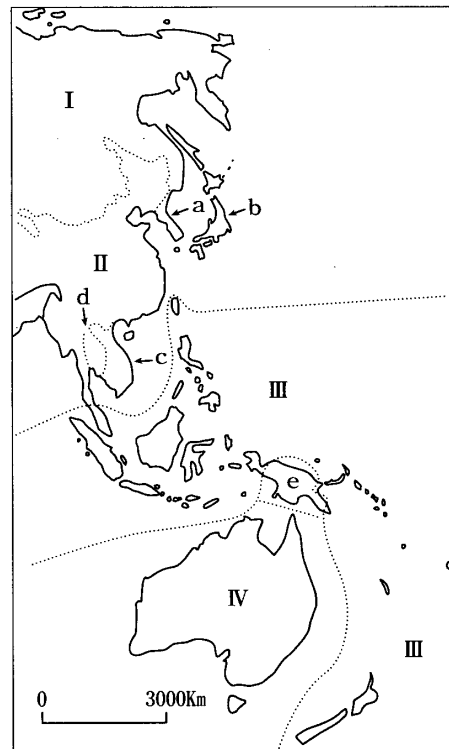
図 3 モンゴロイドとオーストラロイドの分布

〔典拠〕二宮書店編集部, 1998, 83頁。ベルウッド, 1989, 9-44頁。片山, 1993, 16頁。

いて、意見の一致はなかなかみられず、検討すべき課題が多く残されている。その主要なポイントは、①縄文人そのものをどのように規定するのか。ア prioriに原日本人＝縄文人とするのか、それともプレ縄文人を措定するのか。後者の場合、プレ縄文人そのものを明らかにするとともに、縄文人の形成過程とその空間的展開を解明すること、および②弥生人のルーツと日本列島におけるその空間的展開過程をより詳細に論じる必要がある。③さらに、①と②の議論において、特にアイヌと沖縄人の位置づけがなかなか難しく、議論の分かれるところであるので、より一層の議論の深化が求められる。だからこそ、本論でも日本人形成における南方要素の関わり方に注目しているわけである。なお、埴原（1993, 273）は日本人の形成について、在来系縄文人と渡来系弥生人の混交の地域偏差に基づいた二重構造を提唱している点を付け加えておきたい。すなわち、日本人そのものが両要素を帯びていたという。ともあれ、現在のところは、プレ縄文人のルーツあるいは類似人種の分布域については、単一の地域を想定するよりも、北アジア、朝鮮半島から黄河下流域、中国東南部、南島から東南アジア方面などとのつながりを想定しておいた方がよからう。

2.2 言語

縄文以前の日本列島には、北アジア系細石刃（荒屋型細石刃…次項参照）を使用する人々が住み、プロト東北アジア語、より特定のいえばアルタイ系言語、特にツングース系言語を用いていたとみられる。崎山（1993a, 294-295）は、縄文前期以降、特に縄文中～後期に当たる4000～5000年前頃にオーストロネシア語族の大移動があって、日本列島にも西オーストロネシア語（東部インドネシア・フィリピン・台湾などの諸語に通じ、さらには西部ミクロネシアの諸語にも通じる…日本語を形成した要素にはオーストロネシア語起源とみなさざるをえないものが多く認められるという）が入ってきたとみる。それに対して、村山（村山・大林, 1973, 198, 208-209）は朝鮮半島ですでにオーストロネシア語系の言語に接触していたアルタイ語系の言語を話す集団が日本列島に渡来し、固有の文法の中に日本列島の西南部の集団のオーストロネシア



I アルタイ系 II シナ・チベット系 III オーストロネシア系 IV オーストラリア系
a 韓国・朝鮮語 b 日本語 c オーストロアジア語
d タイ・カダイ語 e パプア諸語

図4 西太平洋地域の言語

〔典拠〕 Wurm, S. A. & S. Hattori, 1983, pl.25.
二宮書店編集部, 1998, 83頁。ペルウッド, 1981, 141頁。

系言語の要素を採り入れて原始日本語が成立したとし、オーストロネシア語との接触・導入時期や場所については崎山説と違いをみせている。日本語や韓国・朝鮮語は単純にシナ・チベット語系やアルタイ語系に所属させることのできないことを図4が示していることからわかるように、日本語の成り立ちは複雑である。それは、縄文人がいくつかのグループから成ること、あるいは多様な文化の影響を受けてきたとする考え方に通じる。

日本語の基層部に南方のオーストロネシア語の要素があることに注目して、琉球・台湾・フィリピン諸語について触れておこう。台湾のヤミ語はアミ語やイバダン語などと類似し（その一方言という見方もある）、メラネシア語やポリネシア語と相通じる語彙（例えば、「九」は、ヤミ語では*siyam*, メラネシア語では*ciwa*, ポリネシア語では*hiva*）をもつ（土田, 1977, 296-314）。南西諸島内部では、先島諸島と沖縄諸島以北との間には一つのかかなり明確な境界（「笑い」は、先島諸島では*bari*, 沖縄諸島では*warai*という）があるのに対して、沖縄諸島と奄美諸島以北の島々とを比べると、両者の言語境界は曖昧であるといわれる。ここでは、南方諸語の影響が先島諸島まではかなり明確に認められるということに止めておきたい。

2.3 石器

日本列島における石器製作技術体系は、縦長または横長の剥片剥離技術が先行的に存在し、そこに北アジアから伝来したとみられる細石刃文化がまず北海道に出現し、やがて全域に細石刃文化が広まっていく。図5に示したように、この細石刃群は荒屋型と呼ばれ、西はバイカル湖周辺から東は中国東部・ロシア極東部にかけて広く分布し、日本では旧石器時代末期に東北日本を中心に西南日本の日本海側地域までみられた（この圏域は東北日本のブナ・ナラ林文化圏やサケ漁文化圏、アイヌ文化圏とも重なる）。他方、西南日本には細石核の特徴・構成・石器組成において黄河・沂河グループ（小畑, 1989, 48-51）と共通項の多い細石刃文化（例えば、円錐形細石核や横形ナイフ形石器など—竹内理三他編, 1982, 42-43）をもった人々がみられた。

図5に示したようにこの荒屋型細石刃文化の普及過程で、九州地方が在来の技術体系を保持しながら新技術を受容するという柔軟性を示したのに対して、中部・関東地方は在来の技術体系の崩壊の上に新技術を受け入れた（白石, 1989, 66-69）。そのことは、プレ縄文時代の日本列島に文化的な地域差がすでに存したこと、やがて時間の経過とともにそうした差異が平準化されていったことを示唆している点で興味深いし、次に述べる縄文土器の地域的展開の考察においても参考となろう。

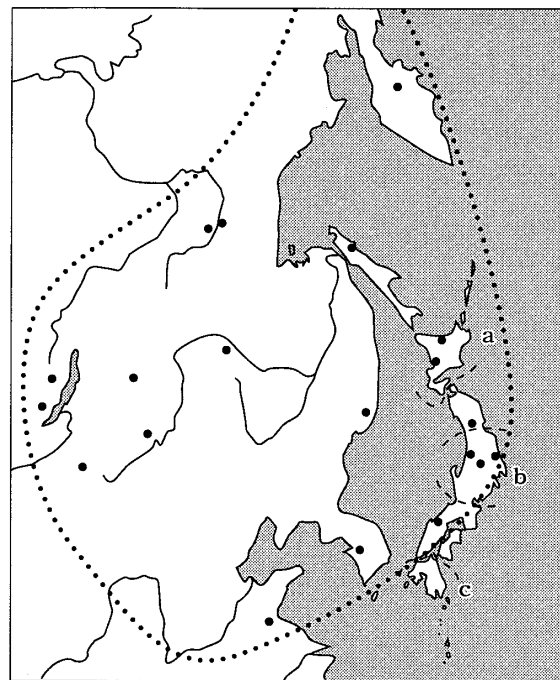
こうした九州以北地域における平準化の動きに対して、九州南部を含めた南の島々ではかな

り異なった時間が刻まれてきたようである。例えば、鹿児島県加世田市の^{かこい}梶ノ原遺跡から出土した円筒型片刃石斧を始め、沖縄本島の丸ノミ型の石斧など、一連の磨製石器は南の東南アジアやオセアニアに広くみられる円筒→方角→有肩という石斧発展系列に属するものとみられ、南の文化が北上した様子が読みとれる（小田，2000，179-217）。先島には、沖縄本島にはないピラ型石器などがみられ、それはフィリピンの新石器技術に由来し、同じく両端刃石器の技術も南方に由来するという。また、熱田原貝塚出土の有孔貝鏃（1480±80BC）は台湾北部の円山文化の有孔石鏃と類似しているという。これらの事実から、南方の要素が先島諸島に、さらにはそこから北の地域にも及んだことがみてとれる。

なお、台湾本土のバツ型石器の名残とみられる^{らんゆい}蘭嶼のヘラ状耕具は、その機能からしてイモ栽培と関連があるとみられる。また、八重山の先史遺跡から数多く出土する焼き石は地炉に用いられたとみられるが（トカラ列島の宝島の縄文後期の地層からも出土）、台湾のルカイ族も地炉を用いることを勘案すると、両地域ではそうした料理法を用いる食料生産がともに行われていたことになる。さらに付け加えるならば、台湾の局部磨製石器は、インドシナ半島の後期ホアビン（Hoa Binh、ほぼ一万年前から農耕開始）文化またはバクソン（Bac-Son）文化の石器に類似しているという。なお、八重山・蘭嶼・バタン島には類似のヘラ状掘り具およびピック状石器と関わりをもつとみられる棒状掘り具との組み合わせがあるという（国分，1986，181-203）。いずれも、南西諸島とその南の島々との間に何らかの関連があることを示唆している。

2.4 土器

縄文時代の各時代の土器様式の分布を見渡すと、西南日本は、九州地方と本州西部（おおむね中部地方より西の地域）とに分かれていたのが、晩期に至って全域的に凸帯文土器様式が優勢となる。一方、東北日本では、北海道が一定の地域性を維持しているものの、他の地域（特



● 荒屋型彫器主要出土地 ○ 荒屋型彫器分布圏

a 北海道型 b 中部型 c 九州型

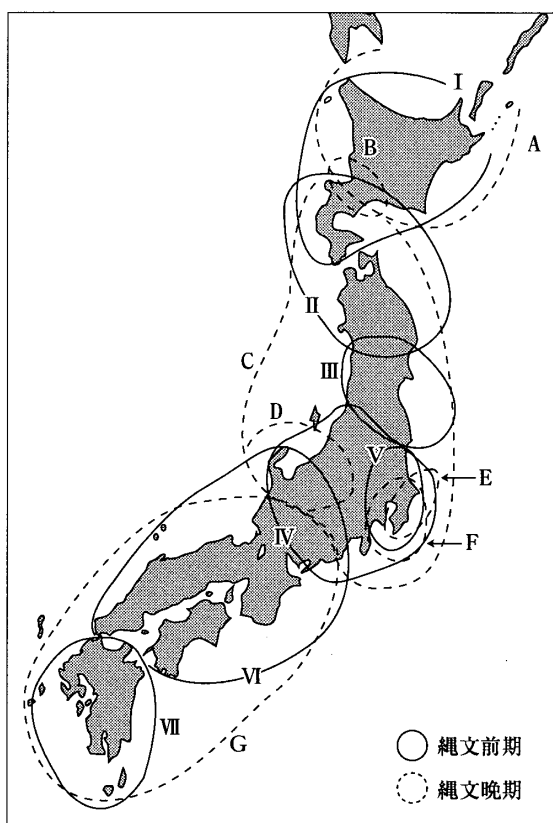
図5 荒屋型彫器分布と石器製作技術体系の地域相
〔典拠〕竹内理三他編，1982，41-44頁。白石，1989頁，69頁。堤，1997，184頁。

に関東・北陸)では各時代ごとに土器様式の分布範囲は大きく変わる。しかし、この東北日本の土器様式も、晩期には地域的偏差を残しながらも図6に示したように亀ヶ岡様式に収斂されてくる。そうした趨勢の中にあって、本州中央部付近は、常に土器様式分布の境界をなし、それだけに土器様式の変化も著しかったが、縄文晩期には日本列島を東西に分かつ土器様式漸移帯をなすに至った。前期と後期の土器様式分布地域を示した図6にはそうした地域性がよく反映されている。かかる縄文文化の東西差が生じた要因は詳らかではないが、その検証に当たっては、生態学的には東北日本：西南日本間の、ナラ林型：照葉樹林型というエコロジカルな環境の差異(橋本, 2002, 154, 図5-2参照)や、採集：採集・半栽培, ナラ林型雑穀農耕：照葉樹林型焼畑農耕といった生産様式の差異(佐々木, 1993, 117-125), およびそうした文化を担った人々の異同関係について考慮する必要がある。また、早期の東北日本にみられた貝殻文の技術がシベリア・中国東北部の櫛目文に、また前期の九州にみられた曾畑式土器が朝鮮半島の櫛目文土器に近いとの意見もあるところから(全教図, 1977, 34), 日本列島以外の地域との

の関係も考慮に入れる必要があるといえよう⁶⁾。

朝鮮半島と日本(九州)との関係については、島津(1992, 58)は両者の間に「交流の路」があったとみるべきであるとしている。それに対して、大塚(1992, 68-70)は隆起文については彼我の間に時間差があり、九州の隆起文は本州方面と常に密接な関係があり、朝鮮半島のものとは直接的な系統関係は無いとしている。水之江(1992, 77)は、半島における隆起文→押引文→櫛目文, 九州における轟B式(隆起文をもつ)→深堀・野口式→曾畑式という土器様式の変化系列の間に一定の関係があったことを認めながらも、基本的には九州における縄文期土器は列島の縄文文化全体の中に位置づけられるとしている。

水稻作を中心とする弥生文化をいち早く受容したのは、凸帯文系土器を擁した西南日本の人々であった。この弥生土器が外来のものなのか、それとも縄文土器の内的発展による



I 縄文尖底 II 円筒下層 III 大木 IV 諸磯 V 浮島
 VI 北白川下層 VII 轟・曾畑
 A 幣舞 B タンネットウ C 亀ヶ岡 D 佐野・中屋 E 前浦
 F 晩期安行 G 凸帯文系土器

図6 縄文時代の土器様式の地域性
 [典拠] 竹内理三他編, 1982, 47-91頁。

ものなのかが問題となる。北九州の遠賀川式土器が朝鮮半島の無文土器の影響を受けたことは否めない(家根, 1987, 19)。しかし, ろくろを用いず, 低温酸化焰による野焼き焼成という製作技術・方法の面では, 縄文土器と弥生土器との間にはあまり大きな差異はみられないことから, 両者の間には技術的連続性が認められる。したがって, 弥生土器は基本的には縄文土器の内的発展に基づいており, 両者の区分は稲作の本格的展開との関連でなされるべきであるという(工楽, 1987, 14,)。しかし, 弥生土器と縄文土器を比較すると, その形態や用途(特に穀物の保存・料理)には大きな差異がみられることも無視できない。また, 先の遠賀川式土器の弥生時代前期における九州から東方への急速な伝播は水稻作普及の空間的・時間的展開と重なること, および弥生文化の外来的要素の多くは朝鮮半島の西部や南部を経て日本にもたらされたことも考慮する必要がある。なお, 弥生土器が縄文土器の内的発展の結果であるという見方をするのであれば, 工楽(1987, 14)は, 稲作の本格的展開期をもって弥生とみなし, その期の土器が弥生土器であるとした方がよいとしている。こうした縄文から弥生という土器様式の大きな変化が基本的には内的発展に因るのか, それとも外部からの導入ないし影響があるのかという点に関しては, 一層の議論の深化が求められる。

南西諸島では, 沖縄本島中部の読谷村の遺跡から縄文前期前半の曾畑式土器が, そしてさらにその下層からは早期の爪形文土器(東原式)^{あがりぼる}が出土したことから, 縄文文化は, その早期ないし前期のかなり早い時期から九州方面より南漸して沖縄本島に到達していたとみられる(高宮, 1991, 10-27)。そして, 後期になると沖縄固有の土器が発達し, 逆に北に向けての伝播の傾向が読みとれる。さらに, 従来は弥生文化は琉球諸島にまで伝播しなかったとされてきたが, 弥生前期から中期の遺物が奄美大島笠利町のサウチ遺跡から出土し, 最近では沖縄本島でも多数の弥生土器が出土するなど, 弥生文化が南西諸島の中中部辺りまでは伝播していたことが明らかにされつつある(本論2.1参照)。すなわち, 土器の面からも, 南西諸島は九州以北の縄文・弥生文化の影響を受けるとともに, 独自の土器文化を発展させてきたといえよう。先島諸島については, 波照間でカーボン年代3850~3260bpと, ほぼ縄文後期に当たる下田原式土器^{しもたぼる}と称される低火度焼成の無文赤色土器が出土しており, 台湾の影響を受けているとみられているが, その系譜関係は明確ではない。ともあれ, 南西諸島の土器文化の起源と性質については, 孤立したもののみより, 周辺文化との交流の中で読み解くべきであろう。

そこで, 南方の土器について若干触れておきたい。台湾南部のアヤタル(Ayatal)式土器は大陸南部の縄文土器^{じょうせき}の流れを汲むとみられるが(西谷, 1992, 28), 大陸極東部の土器群とは系譜を異にするとされる(大貫, 1992, 20)。ベルウッド(1989, 261-286)によると, フィリピンやチモールからは赤色スリッパがけの無文土器(紀元前3000年以前)が出土する。

これらは、オーストロネシア語を話す栽培民のそれぞれの地域への初期拡散と十分に関係があるという。さらに、台湾やフィリピンで似通った装飾土器制作が紀元前2000年（台湾）～1500年（フィリピン）ころから始まる。なお、フィリピンのタボン（Tabon）地区のドゥヨン洞窟の装飾土器は究極的には台湾の縄蓆文土器や円山文化から生じているようにみえるという。それは、先史時代において台湾とフィリピンとの間に交流関係があったことを示唆している。そして、その交流の輪は両地域を越えた広がりを見せた。一方、紀元前1600～1500年頃からオセアニア帯に急速に広がったモンゴロイド系の人々（オーストロネシア語を話す人々—いわゆるラピタ *Lapita* 人）は、ラピタ土器と呼ばれる歯状印文、沈線、貼付文をもつ赤色土器を用いた。この土器群は、東南アジアの土器の発展型とみられ、フィリピンや台湾のものに類似するが、縄蓆文をもたない点で異なり、むしろチモールやスラウエシの紀元前3000年ころの無文土器により近いという（Kirch, 1997, 47-52）。また、^{かめ}甕棺は出土しない。このことは、フィリピンで甕棺葬が出現する時期が紀元前1500年ころであったことと勘案するならば、彼らの東南アジア東部からオセアニアに向けての移住開始年代は甕棺葬が広まる以前、すなわち紀元前1600～1500年以前であったという先の見解と一致することになる。これらの事実からは、縄文後期・晩期になると、南の文化が台湾や南西諸島へと北漸するというよりも、逆の流れがあらわれてくるようにみえる。このことは、南西諸島を含めた日本列島の古い文化層における南方的要素（一部というべきか）は、それよりももっと古い時代に流入ないし根付いていたのではないかと思わせるのである。ともあれ、この点については、今後の研究のいっそうの進展を待ちたい。

2.5 農耕

農耕については、既に別稿（橋本, 2001, 2002）で論じたので、ここでは本論に沿ってその主意を要約しながら、いくつかの点についてはさらに議論を深めておきたい。

縄文時代における基本的な食料確保は狩猟、漁撈、および堅果類などの採集によった。特に東北日本では「成熟せる採集文化」が発達していたという（佐々木, 1986, 105-125）。しかし、西南日本でも縄文後・晩期にはプレ農耕段階としてアワ・ヒエなどの雑穀やヤマノイモ類・サトイモ類（この2類のイモの種別の呼び分けについては、拙稿参照—橋本, 2001b, 315）などのイモの採集ないし半栽培が行われ、晩期にはそれらの作物を栽培する初期農耕が営まれるようになり、その末期から次の弥生時代にかけての稲作受容・拡大の基盤をなしたと推定される（坂本, 1984, 61-69）。こうした東北日本と西南日本における農耕展開の境界線は現在の暖帯林と温帯林の分布境界とほぼ一致する。しかも、この境界線の西の方は前述の縄文土器様式

の分布にみられる東西の境界域（橋本，2002，154，図5-2参照）とも重なる点が興味深い。

中央アジア・インド北西部原産とみられるアワ・キビなどの雑穀はかなり早い時期に中国から日本列島に伝わり，在来のヒエなどとともに栽培されていたとみられる。また，サトイモ類も東西軸（ナガイモ伝播）や南軸（ダイジョウ＝ヤムイモ伝播）から伝わり，在来の山芋とともに栽培されていたようである。これらの雑穀やイモ類が食物として栽培（半栽培のケースも含めて）されるようになった時期については，コメ栽培の導入時期との時間的な前後関係という文脈で語られることが多い。例えば坪井（1979，203-209）は，正月にコメのモチに代わって山芋（東北日本），里芋（西南日本…奄美諸島まで），アワ（西南日本），タロイモ（奄美諸島以南）などが用いられる，いわゆる「モチ無し正月」を行う地域（橋本，2002，152，図5-1参照）が北海道を除く本州以南地域のあちらこちらにみられることを指摘している。そして，それらの地域におけるハレの儀式において，コメよりもこれらの作物により重要な地位が与えられているのは，これら作物の導入の先行性を示唆するものであるとしている⁷⁾。なお，南の奄美大島以南地域ではヤムイモ（ダイジョウ）が栽培され，先島諸島では儀礼をとまなう（吉成・庄武，1997，1-6）ことを付け加えておきたい。上記の作物の中で，タロイモ・ヤムイモ以外の作物は温帯性であり，いずれもその直接的な起源は温帯アジアに求められる。それに対して，奄美諸島以南地域で栽培されているタロイモ・ヤムイモは熱帯性の作物で，熱帯地域に起源する。南西諸島，特にその北部地域はまさにタロイモと里芋，ヤムイモと山芋が交会する地域，さらにいえば熱帯作物と温帯作物の交会地域ともいえよう（橋本，2002，149-150，図4-1参照）。

なお，サトイモ類の伝播について若干の付言をしておきたい。吉野（2003，133-138）は，作業仮説としながらも，インド東部をサトイモ類の原産地と措定し，伝播経路としては温帯中国を経由する北ルートと東南アジア島嶼部を経由する南ルートを挙げている。また，日本の本州・琉球列島（115系統）および中国本土・台湾・ベトナム（95系統）で採集されたサトイモ類のDNA分析した松田（2003，147-150）は，本州で圧倒的に多い三つのパターンは中国本土・ベトナムに通じ，温帯系統の一環をなすのに対して，琉球諸島のパターンはそれらの地域ではみられず，台湾に通じるとし，南方系統をなすことを示唆している。ただし，琉球諸島のものが3倍体であるのに対して，台湾のものは2倍体であるという。この点に関しては，2倍体・3倍体別の伝播経路を論じたイエンらの説（Yen & Wheeler, 1968, 259-267）を再検討する余地がある。

南西諸島では，イモ類と並んでアワがイネに先行する作物として儀礼の上で重要な位置を占める。したがって，このアワを始めとする雑穀や麦類のプロト農耕における位置づけが重要な

課題となる。関連していえば、台湾のヤミ族はアワ・タロイモ・ヤマイモをハレの食物として用いるといわれ、またフィリピンのバタン島ではヤマイモはケの食物であるのに対してアワがハレの食物となっていることなどとの比較検討も欠かせない。ともあれ、こうした民俗儀礼からの証言は、南の島々でもイモ類と雑穀類の栽培が稲作に先行したことを示唆するものとして有意であるといえよう。

東南アジアから太平洋を東へと渡ったと考えられているラピタ人との関係について若干触れておきたい(橋本, 2002, 1-9, 図1-1参照)。東南アジアでは、稲作が入る前からタロイモ耕作がなされていたと考えられる。農法の比較検討をおこなった田中(2003, 244)は、東・東南アジアの稲作技術は作物個体を対象に磨き上げられた技術が基礎になっていて、その出自は同じく個体を対象とする養育農法によってイモ類などを栽培した根栽農耕に求められるとしている。この点を踏まえるならば、ラピタ人は稲作を知らないわけだから、プレ稲作段階、すなわち根栽農耕文化段階において原郷である東南アジアを出発したことになる。言い方を換えれば、ラピタ人が最後に東南アジアを後にした地域(小スンダ列島からフィリピンにかけての地域)への稲作導入は彼らが故地を離れたBC1600年頃以降ということになる。このラピタ人の原郷と日本文化にみられる南方的性格とを結びつけることが許されるならば、ラピタ文化は根元の所で日本の南島文化となりがしかの繋がりをもつということになる。しかし、現在のところ両者を直接結びつけるような証左はあがっていない。

稲作の起源地については、作物学・植物遺伝学の立場から雲南を中心とする照葉樹林帯(中尾, 1966, 21-58)、アッサム(Assam)・雲南センター(渡部, 1977, 194-214)、雲南・インドシナ半島北部(中川原, 1985, 196-202)、そして考古学的見地からは長江中・下流域(巖, 1996, 18-21)などが候補地として挙げられてきた。しかし、近年の研究ではイネの栽培化地域は長江中流域であろうとされ、おそらく1万年以上前から稲作が行われていたことが明らかになりつつある。その栽培品種はジャポニカ(*japonica*)種とされてきたが、最近、長江下流の新石器時代(約6500年前)の三星遺跡の炭化米のDNA分析から、1粒は熱帯型であることが判明したという⁸⁾。したがって、初期栽培種が温帯種であると限定することはできない。

日本における稲作開始はおそらく縄文晩期であったろう。そうだとすると、大陸における稲作開始時期と時間的に大きくズレることになるが、その自然的要因としては、温暖期を迎えて海進が進み、日本列島と大陸を結ぶ陸路は水域によって隔てられたこと、また海進によって列島における平地は狭められ、水稻作適地も乏しくなっていたことなどがあげられよう。その頃の縄文経済は、地域差を伴いながら堅果類を中心とした採集・狩猟段階、あるいは雑穀・イモ類を栽培ないし半栽培する初期農耕段階にあったことは既に述べたところである。縄文晩期の

海退期に入って、日本列島においても沖積平野が形成され水稲作適地が拡大してくると、稲作が本格化してくる。それは、縄文末期から弥生初期にかけての時代である（紀元前8～3世紀…最近の研究によると、時代はもう少し遡る可能性が高い）。

大陸から日本列島への稲作の伝播経路は、おおむね次の四つの経路に集約される（橋本，2002，156，図5-3参照）。① 長江中・下流域から北上して山東半島→朝鮮半島南部→北九州（渤海湾沿いになお北上を続けてから朝鮮半島を南下するというケースも考えられる），② 長江中・下流域→朝鮮半島南部→北九州，③ 長江中・下流域→九州（海上横断ルート），④（雲南→）中国南部または東南アジア→台湾→南西諸島→九州という「海上の道」などである。

寺沢（1996，70-76）は①のルートを措定し、日本列島における本格的な温帯型水稲作の直接的な淵源を黄河下流域～山東半島の華北雑穀文化と河南稲作文化の融合する「落葉広葉樹林型」稲作文化に求め、半島経由で玄界灘沿岸部に流入したとしている（陳もイモ類栽培や高床式住居など17の指標からこの河南ルートを支持している…陳，1989，40-44）。しかし、佐藤（1993，175-178）は、ジャポニカの水稲晩生種（晩生がイネ本来の性質である）の半島経由伝播は難しいとし、もし可能性があるとするならば、それは暖かい半島南部をかすめて日本に至るというコースであろうとしている。

日本列島でも、温帯ジャポニカ以外に熱帯ジャポニカも栽培されていたとみられる。この熱帯ジャポニカは、その作物特性からして南軸、または南に振れた東西軸（上記のルートでいえば④ないし③のルート）で入ってきたと考えるのが順当であろう。事実、沖縄で見つかっている縄文～弥生時代に連なる出土米（佐藤，1993，170…沖縄に今日に連なる本格的稲作の導入はグスク時代であるとされてきたから、これはそれよりもかなり時代を遡った伝播があったことを示唆することになる）は熱帯ジャポニカで、今日の東南アジアで焼畑耕作されている陸稲に非常に近いという。その伝来ルートとしては、南から海上または沿岸ルートを採用④のコースが措定されている（佐藤，1993，170）。ここに、再び稲作伝播の「海上の道」の再検討が要請されることになる（外山，1996，42）。

当初は雑穀生産や堅果類採集の経済とが並行的に行われ、稲作の普及テンポはそれほど早くはなかったであろう（安田，1996a，14-17）。しかし、日本の中で熱帯種と温帯種の交配が進み、かつ高度な灌漑技術が発達し、早生化が進んだことによって、日本列島における稲作は急速に普及した。なお、この間に列島への稲作伝播の波は何回もあったと考えた方がよかろう。結局、イネ遺物の検出件数は、縄文時代から弥生時代前期にかけて200以上の遺跡・その他に及び、縄文晩期後半以降の水田址の発掘は300カ所にも及んでいるという（外山，1996，30）。

3 「南方の視点」からみた日本文化

日本の先史文化の姿と、その形成過程および展開を解き明かすために、それに関わったとみられる列島を取り巻く周辺文化（東アジア文化圏、北アジア文化圏、オセアニア文化圏、東南アジア文化圏）を東西軸と南北軸という枠組みでとらえ、人種、および言語・石器・土器・農耕という四つの文化要素からアプローチした。

日本人の成り立ちについては、まず日本列島内およびそれを取り巻く周辺地域との人の往来を視野に入れ、多面的に考える必要があることが確認された。そして、プレ縄文人ないしプロト縄文人から縄文人に至る過程、縄文人の空間的展開、および弥生人のルーツと日本列島におけるその空間的展開過程というダイナミズムを論じる必要があることを指摘した。さらに、そこにおいてアイヌと沖縄人が適切に位置づけられなければならない。なお、プレ縄文人のルーツとその分布域については、単一の地域を想定するよりも、北アジア、朝鮮半島から黄河下流域、中国東南部、南島から東南アジア方面などとの繋がりを想定しておいた方がよいとした。

縄文語にはオーストロネシア語起源とみられるものが多く認められるが、それは南方から直接入ってきたものなのか、それとも朝鮮半島ですでにオーストロネシア語系の言語と接触していたアルタイ語系言語を話す集団が日本列島に渡来して日本列島西南部のオーストロネシア系言語の要素を採り入れて成立したものなのかは意見が分かれるところである。ともあれ、原日本語に南方のオーストロネシア語要素が入っていることは紛れもない事実であるといえよう。

石器文化については、プレ縄文時代の日本列島では文化的地域性がみられたが、やがて時間の経過とともにそうした差異が平準化されていった。しかし、九州以南の島々ではかなり異なった時間を刻まれていた。すなわち、沖縄の一連の磨製石器は、東南アジアやオセアニアに広くみられる円筒→方角→有肩という石斧発展系列に属するものとみられるところから、南の文化が北上した様子がうかがわれる。また、地炉やヘラ状掘り具など、南方の農耕文化との関わりを示す石器群も先島諸島で認められる。

縄文土器や弥生土器の展開と地域性には、それぞれの地域における食料生産・加工技術のあり方や周辺文化の影響ないし交流が大きく関わっている。そのことは、北九州の隆起文土器の形成・発展における朝鮮半島文化の影響や、遠賀式土器の形成とその東方への伝播などにおいて確認された。なお、南西諸島は九州以北の縄文・弥生文化の影響を受けるとともに、独自の土器文化を発展させてきた。先島諸島では下田原式土器と称される低火度焼成の無文赤色土器が出土していて、台湾の影響を受けているとの見方もあるが、その系譜関係は明確ではない。ともあれ、南西諸島の土器文化の起源と性質については、孤立したものとみるよりも、周辺文

化との交流の中で読み解かれるべきであろう。

日本列島における採集・農耕文化の形成とその展開には、北からの狩猟・採集文化、東西軸を次々と渡ってくる雑穀・イネ栽培文化、そして南からの根栽農耕文化が、時間的・空間的にさまざまな形で大きく関わってきた。「南方の視点」からは、南西諸島の南に連なる台湾・フィリピン、そしてその先の東南アジアの島々やそこから分かれたラピタ人が辿った道筋との関係を視野におさめながら、イモ・雑穀文化だけでなく熱帯ジャポニカ種やインディカ種といったイネの流入についても検討すべきであることを述べた。

以上の検討から見えてきたのは、日本の先史文化がその形成・展開過程からみれば非常に複合的かつ多重的であり、そのことが地域的な多様性をもたらしているということである。また、周辺文化との関係からは、北軸、東西軸、南軸と多軸的に展開していて、しかも南西諸島にみられるように、一方向的な関係というよりも双方向的な面も認められる。したがって、この多重的で複合的な日本文化を読み解くには、双方向的な視点を保持しつつ、時間軸と空間軸からそれぞれの形成・展開過程を一枚一枚解きほぐすとともに、因果関係の編み目に組み直していくという根気のいる作業が必要となる。その大きな一つの作業として、プロト日本人と港川人の位置、原日本語におけるオーストロネシア語的要素、台湾に通じる石器群、南方系土器群、稲作に先行する縄文農耕と根栽農耕の関係などに南方文化圏の影響が広く認められることを踏まえて、「南方の視点」から日本文化を捉え直す必要がある。そのことが、本論で確認できたのではないかと思う。

[付 記]

本研究は、平成15年度関西大学研修員研修費によって行ったものである。

注

- 1) 太平洋地域における航海術の起源と発達を論じたシャープ (Sharp, 1956) はカヌーでもって300～500kmの航海はそう困難ではなかったとしている。古代においても長距離の航行が可能であることを証明するための試験的航海も何度か試みられている。ちなみに、ハワイからタヒチへと古代の装備・航法で航行した双胴カヌーのホクレア号が、5000kmの海を渡ることに成功している。
- 2) ここでいう「南方」は、日本列島から見て南に位置する地域の意で、具体的には中国東南部、東南アジアおよびオセアニア西部を指す。なお、場合によってはそれらの地域に連なる南西諸島を含めていう場合もある。
- 3) 近年、静岡県西部で発見されていた浜北人の古人骨を放射性炭素年代法で計測したところ、約1.4万年前のものと判明したという (近藤恵・松浦秀治両氏、朝日新聞2002.9.14朝刊)。
- 4) DNA分析の結果、その65%は高顔型の弥生人系で、35%が低顔型の縄文人の要素を具有しているとい

- う。なお、ミトコンドリアは細胞中のエネルギー生産に関わる器官で、母方のDNAを伝える。
- 5) この南系モンゴロイドのうち、ルソン島のボントク族・イフガオ族、スマトラ島のバタク族、セレベス島のトラジャ族などはオーストラロイドの特徴も有することから、先住オーストラロイドと南下してきたモンゴロイドとの混血によるという見方もある。また、メラネシア人については、オーストラロイドに帰属するという意見と南系モンゴロイドとの混交を重くみる意見とがある。ここではⅣ：その他（メラネシア人・パプア人）としておく。
- 6) 野村（1992, 39-42）は、北海道にみられる縄文土器の基本的性格は本州の縄文文化の北進によって形成されたとしながらも、サハリンのサルゴリ文化との関連性も示唆している。
- 7) ただし、モチ無しだからといって、その地域一帯でイネに先行してアワなどの雑穀が栽培されていたとは一概にいけないことにも留意しておく必要がある。
- 8) 佐藤・朝日新聞2002.4.7,朝刊。温帯ジャポニカは雑種弱勢のHwc-2遺伝子をもつものに対して、熱帯ジャポニカは雑種強勢のhwc-2の遺伝子をもつ（佐藤, 1993, 169）。

参考文献

- 王 建新（1996）：農耕の起源，季刊考古学54号，35-39
- 大塚達朗（1992）：縄文草創期と九州地方，季刊考古学38号，68-74
- 大貫静夫（1992）：アジアの先史文化，季刊考古学38号，17-20
- 小田静夫（2000）：『黒潮圏の考古学』，第一書房
- 小畑弘己（1989）：中国大陸から日本列島へ，季刊考古学29号，48-51
- 尾本恵市（1987）：オセアニアの人種，石川栄吉編『オセアニア世界の伝統と変貌（民族の世界史14）』所収，山川出版社，37-54
- 片山一道（1993）：石器時代の遠洋航海者の系譜，大塚柳太郎・片山一道・印東道子編『島嶼に生きる（オセアニア①）』所収，東京大学出版会，3-19
- 加藤晋平（1988）：『日本人はどこから来たか』，岩波書店
- 木村英明（1992）：北海道の石刃鏃文化と東北アジアの文化，季刊考古学38号，43-47
- 巖 文明（1996）：世界最古の土器と稲作の起源，季刊考古学56号，18-21
- 国分直一（1986）：『海上の道一倭と倭的世界の模索一』，福武書店
- （1992）：『日本文化の古層一列島の地理的位相と民族文化一』，第一書房
- 工楽善通（1987）：弥生土器の世界，季刊考古学19号，14
- 坂本寧男（1984）：雑穀類の系譜，歴史公論103号，61-69
- 坂本寧男（1993）：雑穀とモチの民族植物学，佐々木高明・森島啓子：『日本文化の起源一民族学と遺伝学の対話一』所収，講談社，199-227
- 崎山 理（1993a）：総合討論一民族学と遺伝学の対話一，佐々木高明・森島啓子編『日本文化の起源一民族学と遺伝学の対話一』所収，講談社，294
- （1993b）：オセアニアの言語的世界，大塚柳太郎・片山一道・印東道子編『島嶼に生きる（オセアニア④）』所収，東京大学出版会，65-84
- 佐々木高明（1971）：『稲作以前』，日本放送出版協会
- （1986）：『縄文文化と日本人一日本基層文化の形成と継承一』，小学館
- （1993）：日本文化の起源を考える一遺伝学との対話に期待するもの一，佐々木高明・森島啓子：『日本文化の起源一民族学と遺伝学の対話一』所収，講談社，9-41
- （2003）：『南からの日本文化（上巻）・（下巻）』，日本放送出版協会
- 佐々木高明・森島啓子（1993）：『日本文化の起源一民族学と遺伝学の対話一』，講談社

- 佐藤洋一郎 (1993) : 遺伝学からみた稲の伝来と稲作文化の受容, 佐々木高明・森島啓子 : 『日本文化の起源—民族学と遺伝学の対話—』所収, 講談社, 159-197
- (1996) : 稲のルーツ, 季刊考古学56号, 27-31
- 島津義昭 (1992) : 日韓の文物交流, 季刊考古学38号, 54-58
- 白石典之 (1989) : 細石刃石器群の出現過程, 季刊考古学29号, 66-69
- 全 教 図 (1956, 1977復刻) : 『日本歴史地図』, 冬至書房新社
- 鈴木公雄 (1990) : 『争点: 日本の歴史1—原始編—』, 新人物往来社
- 高倉洋彰 (1991) : 稲の来た道, 季刊考古学37号, 40-45
- 高宮廣衛 (1991) : 『先史時代の沖縄』, 第一書房
- 多賀谷 昭 (1993) : 身体形質の多様性, 大塚柳太郎・片山一道・印東道子編, 『島嶼に生きる (オセアニア①)』所収, 東京大学出版会, 19-34
- 竹内理三他編 (1982) : 『日本歴史地図 (原始・古代編<上>)』, 柏書房
- 竹岡俊樹 (2003) : 『旧石器時代の型式学』, 学生社
- 田中耕司 (2003) : 根栽農耕と稲作—「個体」の農法の視点から—, 吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト』所収, 平凡社, 229-246
- 陳 文華 (1989) : 中国の稲作起源をめぐる諸問題, 陳 文華・渡部 武編『中国の稲作起源』所収, 六興出版, 9-46
- 土田 滋 (1977) : パシフィック諸語の文化圏, 黒潮文化の会編『日本民族と黒潮文化』, 角川書店, 296-317
- 堤 隆 (1997) : 氷期の終わりと細石刃文化, 岡村道雄編 : 『ここまでわかった日本の先史時代』, 角川書店, 176-200
- 坪井洋文 (1979) : 『イモと日本人』, 未来社
- (1982) : 『稲を選んだ日本人』, 未来社
- 寺沢 薫 (1996) : 日本稲作の系譜と照葉樹林文化論, 季刊考古学56号, 70-76
- 徳永勝士 (1993) : 総合討論—民族学と遺伝学の対話—, 佐々木高明・森島啓子編『日本文化の起源—民族学と遺伝学の対話—』所収, 講談社, 275
- 百々幸雄 (1995) : 頭骨の形態小変異を探る, 『科学朝日』編『モンゴロイドの道』, 朝日新聞社, 174-184
- 外山秀一 (1996) : 日本列島の稲作の始まり, 季刊考古学56号, 39-43
- 中尾佐助 (1966) : 『栽培植物と農耕の起源』, 岩波書店
- 中川原捷洋 (1985) : 『稲と稲作のふるさと』, 古今書院
- 中山誠二・外山秀一 (1991) : 稲と稲作の波及, 季刊考古学37号, 23-28
- 西谷 大 (1992) : 中国東部沿岸の先史時代, 季刊考古学38号, 25-29
- 二宮書店編集部 (1998) : 『高等地図帳』, 二宮書店
- 野村 崇 (1992) : 縄文文化と大陸文化, 季刊考古学38号, 39-42
- 橋本征治 (1987) : 南西諸島の田芋灌漑耕作—農耕文化論的予察—, 横田健一先生古稀記念会編『文化史論叢 (下巻)』所収, 845-864
- (1994) : 田芋 (タロイモ) 灌漑耕作の農耕文化論的比較考察—南西諸島—, ジオグラフィカ センリガオカ2, 67-106
- (1998) : 太平洋地域におけるタロイモ栽培の比較研究, 橋本征治編『現代社会と環境・開発・文化—太平洋地域における比較研究—』所収, 関西大学出版部, 217-255
- (2001) : 日本の農耕文化とイモ栽培, 関西大学東西学術研究所編『関西大学東西学術研究所創立五十周年記念論文集』所収, 関西大学東西学術研究所, 313-326
- (2002) : 『海を渡ったタロイモ—オセアニア・南西諸島の農耕文化論—』, 関西大学出版部

- 埴原和郎 (1993) : 総合討論—民族学と遺伝学の対話—, 佐々木高明・森島啓子編『日本文化の起源—民族学と遺伝学の対話—』所収, 講談社, 273
- 馬場悠男 (1990) : アイヌ・琉球人は縄文人の直系子孫か, 鈴木公雄, 『争点: 日本の歴史1—原始編—』所収, 新人物往来社, 106-122
- 寶来 聰 (1993) : 日本人はどこからきたか—遺伝学からみたモンゴロイドの拡散—, 佐々木高明・森島啓子: 『日本文化の起源—民族学と遺伝学の対話—』所収, 講談社, 69-98
- ベルウッド (植木 等・服部研二訳) (1989) : 『太平洋—東南アジアとオセアニアの人類史—』, 法政大学出版局
- 堀田 満 (2003) : 根栽農耕で利用される「イモ型」植物, 吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト』所収, 平凡社, 9-34
- 松田正彦 (2003) : 日本のサトイモ—系譜と現在—, 吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト』所収, 平凡社, 9-34
- 松村真紀子 (1991) : 東アジア出土新石器時代穀物の年代的分布, 季刊考古学37号, 33-35
- 松本秀雄 (1989) : 北・南モンゴロイド遺伝子の拡散, 季刊考古学29号, 74-77
- 水ノ江和同 (1992) : 曾畑式土器の成立, 季刊考古学38号, 75-78
- 村山七郎・大林太良 (1973) : 『日本語の起源』, 弘文堂
- 安田喜憲 (1996a) : 稲作の環境考古学, 季刊考古学56号, 14-17
(1996b) : 「東亜稲作半月弧」と「西亜麦作半月弧」, 季刊考古学56号, 22-26
- 柳田國男 (1961) : 『海上の道』(定本柳田國男集 第一巻), 筑摩書房
- 家根祥太 (1987) : 弥生土器の誕生と変貌, 季刊考古学19号, 18-23
- 吉成直樹・庄武憲子 (1997) : 日本における熱帯系根栽農耕文化の展開に関する文化地理的考察, 高知大学学術研究報告46巻, 1-24
- 吉野熙道 (2003) : サトイモ—進化の一断面と根栽農耕における位置—, 吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト』所収, 平凡社, 121-140
- 渡辺 誠 (1975) : 『縄文時代の植物食』, 雄山閣
- 渡部忠世 (1977) : 『稲の道』, 日本放送出版協会
- Kirch, P.V. (1997) *The Lapita Peoples: Ancestors of the Oceanic World*. Blackwell, Cambridge.
- Sharp, A. (1956) : *Ancient Voyagers in the Pacific*, The Polynesian Society, Wellington.
- Spriggs, M. (1997) *The Island Melanesians*. Blackwell, Cambridge.
- Wurm, S.A. & S. Hattori <gen. eds.> (1983) : *Language Atlas of the Pacific Area*, the Australian Academy of the Humanities in Collaboration with the Japan Academy, Canberra.
- Yen, D.E. and J.M. Wheeler (1968) Introductoin of Taro into the Pacific: The Indications of the Chromosome Numbers, *Ethnology*, 7, 259-267.